

生活環境が子どもの健康や心身の発達におよぼす影響に関する研究 総括研究報告

松田 一郎

要約：（１）高層階住居は、妊娠・分娩・育児に種々の影響を与えているが、生活指導することで改善される余地があるように思われる。また今後高層住居を建築する場合、いくつかの必要事項も指摘されよう。母親の受動喫煙は子どもの健全な心身の発育を障害する。（２）テレビ、テレビゲームは子どもの生活に深く入り込んでいるだけにマイナス面を抑えプラス面を伸ばしたい。テレビの視すぎは運動時間を減少させるし、テレビゲームのあるものは年少者に好ましくない内容のものがあ、チェック機構がある。（３）成人女性での骨粗鬆症が問題になっているが、女性の骨密度は18歳で頂値になりその後ゆるやかに減少する。したがって中学・高校生の時に適正な運動と、十分なカルシウム摂取を指導することが大切である。（４）小児事故防止対策は研究段階から実施段階に入った。（５）国際協力のもとでわが国でも地域を限って先天異常モニタリングが行われているが、問題なくスムーズに進めるための方法を検討した。

見出し語：生活環境，学習環境，テレビ，骨塩量，事故，先天異常

I. はじめに

生活環境が年々変わっているが、その中で子どもの健康はどのように影響を受けているのだろうか。この調査研究を通じてその実態を少しでも解明したい。当然その中には負の面のみでなく正の面もあると思われるが、負の面についてはそれを改善するためにはどう対応すべきなのか、指針をつくるための資料が蓄積されればと思う。そのためにも研究内容をできるだけ客観性にまとめるために数量で示し、批判に耐えるものにしたいと考

える。

II. 研究は次の5つの分担研究に分けた

1. 居住環境と子どもの健康（松田一郎）
2. 学習、遊び（学習方法、テレビゲーム、テレビ）と子どもの健康（谷村雅子）
3. 小児の骨発育と骨障害（清野佳紀）
4. 小児の事故とその予防（田中哲郎）
5. 先天異常モニタリングに関する研究（住吉好雄）

である。それぞれのリサーチクエッションは各分

1) 熊本大学医学部小児科 (Dep. of Pediatrics, Kumamoto, Univ.)

担報告の中に記載した。

III. 研究方法

各分担研究者は年度初頭研究打ち合わせの班会議を開催し、厚生省からのコメントも含め、研究内容を検討した。アンケートの内容のチェック、研究方法の検討、などを行い、それに基づいて研究活動を行った。

IV. 結果と考察

(1) 高層階居住（6階以上）の妊婦は低層階居住の妊婦に比して流産頻度が高いことが知られている。低層階居住妊婦を1～3、4～5階に分けてみるとむしろ後方で流産頻度は少ないことが判った。高層階居住の妊婦の外出回数は少ない。おそらくこれらを総合して考えると、適度の運動が正常の妊娠維持に必要と言えよう。他に飲酒や妊婦が相談する人の有無なども流産に関与する因子になることも判明した。

住居についての満足度は、住宅環境、例えば近くに医療設備があるかないか、公園があるかないか、なども関係するが、その他に母親の心身状態、父親（夫）の住居に対する満足度に左右されることも判った。

親子関係・友人関係についてみると、高層階居住の家族では、母子・兄弟で過ごす時間が低層階居住の家族よりも長く、また、団地内のコミュニケーションである催し物への参加頻度が少なかった。

両親、特に母親の受動喫煙は子どもの心身の健全な発育に問題をもたらしていることが示された。例えば子どもの問題行動の出現頻度は、母親の喫煙本数との間に有意に正の相関があり、20本以上吸っている母親の受動喫煙児では、他人をおど

したり、集団の中での悪行、注意を聞かないなどの項目で有意に高頻度になる結果を得た。

(2) テレビ、テレビゲームの視すぎが問題になっている。子どもは種々のパラメーターを用いて明らかに疲労していてもさらにゲームを続けることを望んでおり、自分の判断で適正な時間間隔をとって遊ぶということはかなり困難であると思われる。したがって、ある時間がきたら続けられないようなシステムを組み込んでおく必要性を痛感する。内容も年少者にとってはかなり刺激的なものがあつて、それも未成年者の手の届く処にあるのが問題である。テレビの視すぎ運動不足は肥満につながるが、一度肥満になると、スポーツも好まなくなり、正常の体型に戻すのはかなり困難である。「肥満」はむしろ予防するように指導することを考えるべきであろう。

(3) 骨（密度）の発育は男女で異なり、男は20歳頃にピークに達し、それを維持し60歳に達してもあまり変わらない。女性は11歳頃、骨密度の増加が最も著しく、18歳でピークボーンマスに達し、骨形成が成熟する。したがってこの間、適度の運動を行い、カルシウムを必要十分量摂取しておかなければ後年、閉経後、骨粗鬆症になり易くなる。このことは若い女性に、無謀なダイエットなどをせず、正しい栄養学の知識を与えるように中学・高校で指導しなければならないことを示している。

(4) わが国の子どもの1～9歳の死亡原因のトップは事故死である。そこで事故防止のためのモニタリングシステムの検討と、啓蒙活動を通じての事故防止の指導を行った結果、効果をあげ得ることが判った。今後は全国的にこうした運動を展

開していくことを行政に期待したい。

(5) 先天異常のモニタリングを神奈川、石川、愛知の各県で人口ベースで、東京では病院ベース行い、国際のクリアリングハウスでも成果を報告した。

特に最近ある特定の先天異常が増加傾向にあるというようなことはなく問題はないと考えられる。しかし、今後、特定の先天異常の頻度が高まり（かつてのサリドマイド事件のように）、その要因を知る必要があるとなった場合、その集団にどうアプローチするのが倫理的に許されるのかが問題になる。今後法的な対応、同時に国際疫学ガイドラインなどを参考にし、インフォームドコンセントをどこまでのレベルで必要とされるかをまとめる。

V. 今後の問題

今回までの成績をみると、それぞれの問題解決のための生活指導のガイドラインを定め、それぞれの対象者に熱心に根気よく説明していけばかなりの問題が解決されるように思う。得られたデータをぜひ行政の立場で生かしていただきたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:(1)高層階住居は、妊娠・分娩・育児に種々の影響を与えているが、生活指導することで改善される余地があるように思われる。また今後高層住居を建築する場合、いくつかの必要事項も指摘されよう。母親の受動喫煙は子どもの健全な心身の発育を障害する。(2)テレビ、テレビゲームは子どもの生活に深く入り込んでいるだけにマイナス面を抑えプラス面を伸ばしたい。テレビの視すぎは運動時間を減少させるし、テレビゲームのあるものは年少者に好ましくない内容のものがあ、チェック機構がある。(3)成人女性での骨粗鬆症が問題になっているが、女性の骨密度は18歳で頂値になりその後ゆるやかに減少する。したがって中学・高校生の時に適正な運動と、十分なカルシウム摂取を指導することが大切である。(4)小児事故防止対策は研究段階から実施段階に入った。(5)国際協力のもとでわが国でも地域を限って先天異常モニタリングが行われているが、問題なくスムーズに進めるための方法を検討した。